

かささぎ 通信 第155号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2026年 1月 9日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2025年12月の「森三郎の作品を読む会」では、「城下町」(季刊『新児童文化』復刊1946年8月)を読みました。連続四回目です。

いよいよ「城下町」の最終章です。二十年の歳月が流れ、尋常小学校高学年だった宗之助は三十代になり東京で新聞記者をしています。今では二人の女の子の父親です。岸田家も小松家も代が変わって、かつての反目から解放され、宗之助は岸田の譲おじさんの息子とも親しく話ができる間柄です。「城下町」最初の章で、お父さんを亡くした寂しさを象徴するかのよう登場した白い道が最終章で再び現れて、長い物語は終わりました。

森銃三「白い道」(初出『笹』1936年9月号、『森銃三著作集続編』第十五巻)に描かれた、子どもころ両親と通った不確かな記憶の道と重なるような表現だったので、兄の文章からの影響について会で紹介しました。(神谷磨利子)

★今回は参加者の感想をいくつか紹介します。

(河橋 育実)

物語の冒頭の文章は三郎さんの十六才上のお兄さんの銃三さんの「白い道」を連想させます。読み進めると、又、銃三さんの「白壁の校舎」(初出『亀城校創立六十年記念誌』1935年3月、『森銃三著作集続編』第十五巻)を感じる箇所があります。これは三郎さんが、兄の銃三さんを尊敬していたからだと思います。

物語の舞台は刈谷かと思わせる描写が随所にあり、親近感が湧きます。小学四年生の宗之助が主人公ですが、病気の後、久しぶりに登校したらお城山に「カルピス」の立看板が立っていたという件がありました。こちらも三郎さんが尊敬していた『赤い鳥』の鈴木三重吉さんが好きな飲み物だったそうです。読む会では「カルピス」のシンボルマークの話になり、メンバーからは懐かしいと盛り上がりました。

そして三郎さんが『赤い鳥』で発表した「杉でつばう」(1933年

10月号)や「角兵衛獅子」(1934年3月号)を想い起こさせる場面もあります。

宗之助が四つの時お父さんが亡くなり、お腹に二人目の子があるお母さんは宗之助と実家に引き取られ、以来両家はいがみ合い辛い幼少期を過ごします。大人になった宗之助はお父さんの弟の一人息子・英司(従兄弟)と仲良く話ができる間柄になっていて良かったと思えました。

ただこの「城下町」の元になると思われる『城下町と少年』が昭和18年に書かれていたそうです(注)。そういう年代のせいなのか、二人の行末に不安を感じました。

(注) 酒井晶代「解説」森三郎・人と作品(1995年、刈谷市教育委員会編『森三郎童話選集 かささぎ物語』p.219)には、「日本少国民文学新鋭叢書」の一冊に、三郎の『城下町と少年』が予定されていたが発行されなかったと書かれている。戦後『新児童文化』に発表された「城下町」はその時の単行本予定の原稿に手を入れた作品ではないかとされている。

左図予告の森三郎『城下町と少年』の内容に「1城下町 2少年」とある。「少年」はどんな作品だったのだろうか、読んでみたかった。(神谷)



図：新美南吉『牛をつないだ樁の木』(1943年9月、大和書店)巻末の予告記事(国立国会図書館デジタルコレクション)

(David Dykes)

「城下町」は森にとって終戦後の初出版であった。資料が空襲に全焼したためなのか、過去の『赤い鳥』に載せた「杉でつばう」(1933年10月号)と「角兵衛獅子」(1934年3月号)を再利用して亀城小学校高等科頃の記憶に基づいた設定を用意した。少年主人公「宗之助」のやや恵まれた「藩校あとの学校」環境がこの形で紹介される。他方、父親を失った宗之助は、父親の代わりと意識していた岸田の譲叔父さんのほうから少し軽視されている印象を持っているか、また同時に岸田家の戸主「岸田のおじいさん」との距離も感じている。

岸田の大おじいさんは元々刈谷藩医師で、明治の廃藩置県改革の影響で居場所の安定さが弱い。おじいさんは医者になったが、次男(宗之助の譲叔父さん)は医者の許可をまじめに取るうとも思わない。その代わりに西洋の楽器の世界に惹かれ、宗之助も通っている亀城小学校の性格の軽そうなモダンっぽい音楽の先生。高慢な岸田のおじいさんも同学校の学校医。

森の本筋では、譲叔父さんの態度が何よりも無責任に見える、「高嶺の花」の新校歌の作曲に没頭しながら、窓の外で展開している自分の生徒たちによる本物の城山の上の「鳥の巣」を狙う特任務(勇気満々の校歌とともに)より慎重な北原先生にもあてるパロディ)のかなり異常な混乱を気にも留めない。逆の合理だが結果同じく、発病した宗之助に対して、岸田のおじいさんの悪い処置も体調の悪化を招いている。親子(岸田のおじいさん、譲叔父さん)とも子供っぽい。

森の1949年作「ジャンケン橋」の「宗ちゃん」と「三ちゃん」も「城下町」の「宗之助」と弟の「恭ちゃん」との類似性が明らかだ。森の作品以外でも、梶井基次郎「城のある町にて」(1924、場面は三重県松阪)との類似性が否定しがたい。また、志賀直哉の「城の崎にて」(1917)も背後に見られる。

(飯田 芳子)

四回にわたって多くの資料を織り交せて読み進められ、それは中身の濃い味わい深い読書会でした。

『白い道』森銚三著を彷彿とさせる序章は、宗之助の置かれた環境を物語るように、一抹の寂しさを覚えながら、次のセクションへと導きます。そこには城下町が姿を変えて行く様子が、岸田の大おじいさんが御典医から町医者になって、商家が立ち並び、文禮館が廃され学校が建てられました。岸田のおじいさんはやがて医者になり、あとをつぎます。おじいさんの二人の息子の一人が宗之助の父です。宗之助が四歳の時父親が亡くなり宗之助の母親の事で岸田のおじいさんと小松のおじいさんは大喧嘩をし、小松のおじいさんは、お腹に子供のいる娘と宗之助を小松の家に引き取ります。以来口も利かぬ仲になったのです。宗之助は岸田宗之助から小松宗之助になります。岸田のおじいさんは校医です。ある時、健康診断の後で目の悪い生徒八人を自分の医院に呼び検査をした後で、宗之助だけ残します。用意してあった紅茶と菓子をお馳走し、いろいろな話をします。孫を気にかける祖父母の姿でした。この作品の中のトピックスです。彼の中の感情を揺さぶり変えることになったと思うのです。二十年後譲叔父さんの息子恭さんと出会い長いお話をするのですから。

先日昔からの坂道を下り「森銚三・森三郎生誕地」の案内板を見ながら歩きました。かつて宗之助が歩いた城下町、下駄の音がしてくるような錯覚を覚えました。

〈次回予定〉2026年2月13日(金)午後一時半〜三時半

「三色すみれ」(『日本児童文学』5、1947年11月)

「帽子に化けたクロネコ」(『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』

1949年12月)